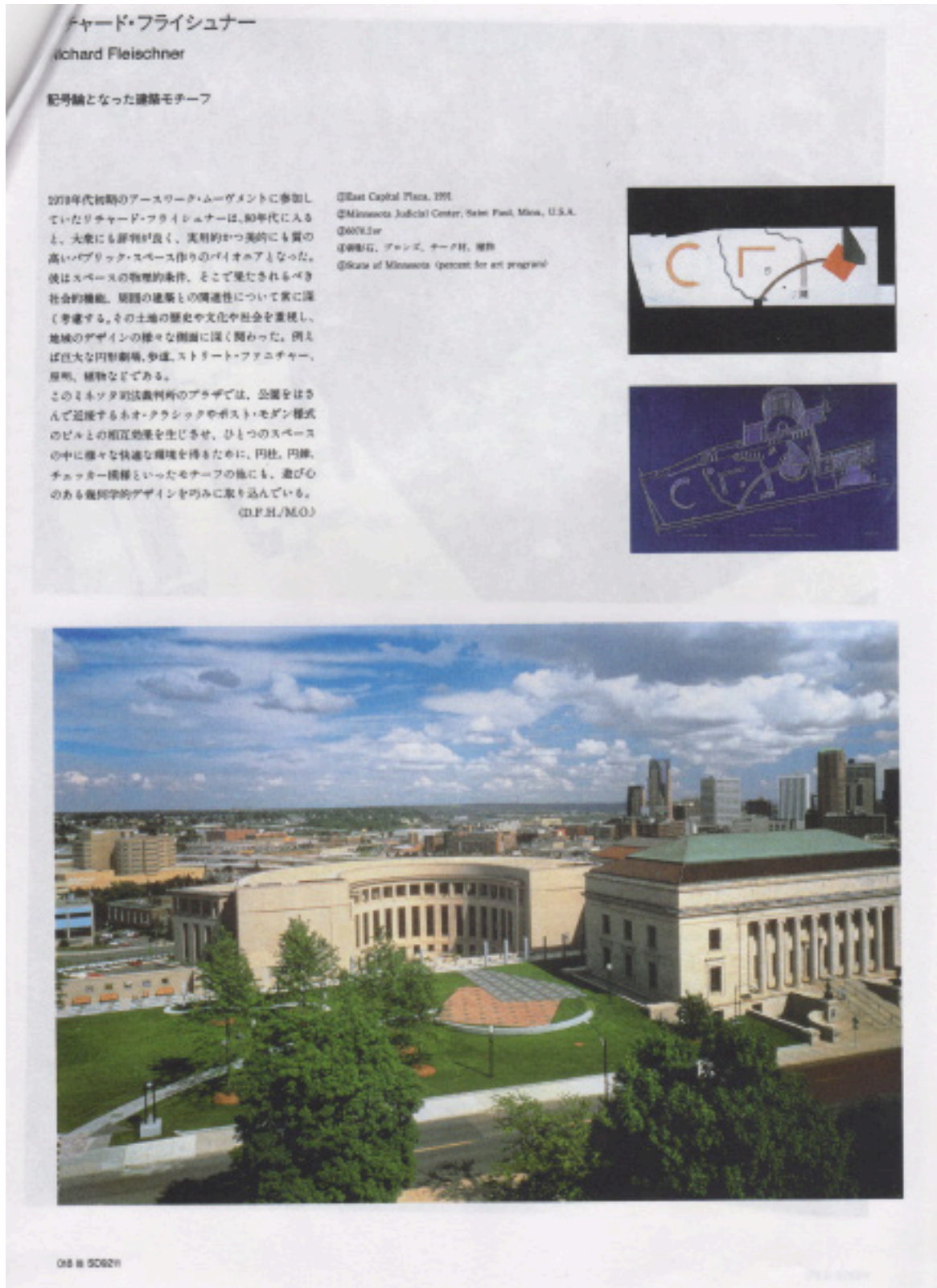
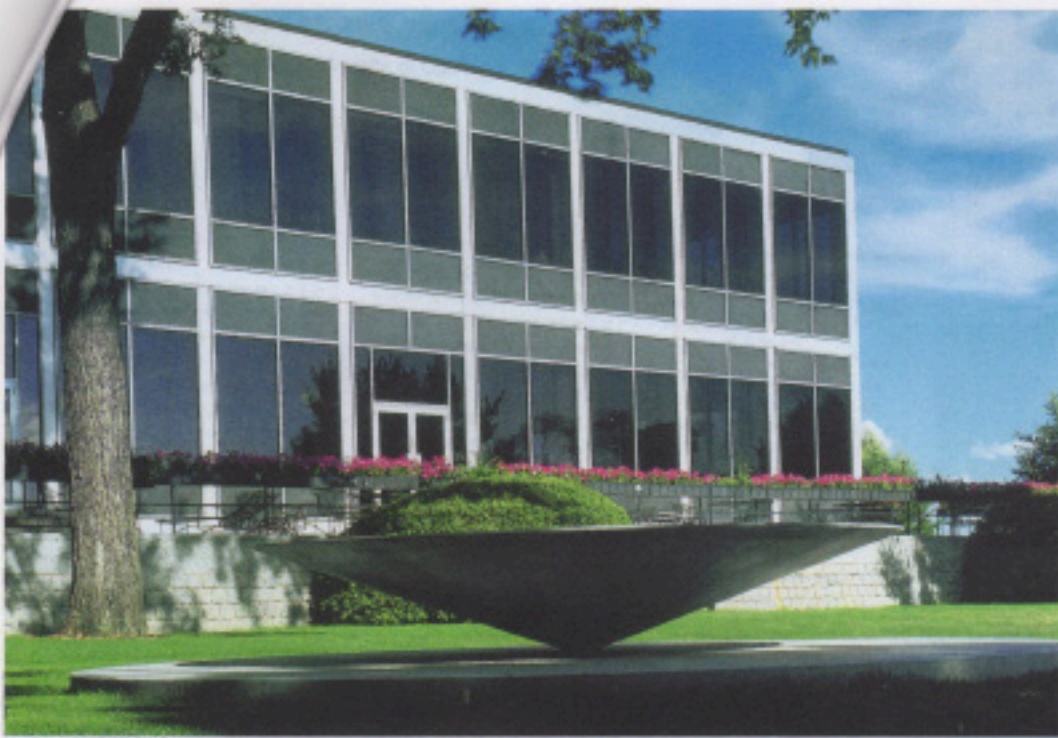


Nanjo, Fumio. "Art and Public Space." Space Design, no. 338, Nov. 1992, pp.







GENERAL
MILLS
PROJECT
#9

スチュアート・コレクションは、先天的なアーティストに、ある特定の場所に即したユニークな作品制作を依頼し、そのコレクションの充実を図ることによってUCSD(カリフォルニア大学サン・ディエゴ校)のキャンパスのみならずサン・ディエゴの地域全般における文化的、知的側面の向上に力を注いでいる。美的観点から見ても、またその実践的な作業プロセスから見ても特筆すべきプロジェクトであろう。

巨大な敷地を有するUCSDキャンパスは北サン・ディエゴのラ・ホイヤにあり、太平洋を臨むドラマティックなメーサ(米国南西部の乾燥地方に多く見られる、周囲が絶壁となった卓上の岩層台地)に位置している。森の峡谷、ユーカリの木立、広場や青々とした芝生、といった自然に恵まれた所だ。校舎の建築はカリフォルニアの別荘風、第二次世界大戦時の兵舎、1950、60年代の構造主義建築から現代のポスト・モダン的な建築まで、実に多様である。

コレクションは大学とスチュアート財団との新設なパートナーシップにより維持されている。82年、協定により、大学の全キャンパスがコミッション・ワークの場として考慮されることになった。建築に統合した作品をコミッションするなど、いわゆる彫刻庭園との違いを明確にしている。

スチュアート財団の顧問委員会はスチュアート・コレクションの担当スタッフと共に、プロポーザルを提案し、展開させていくようなアーティストを定期的に招聘している。アーティストの提案したプロポーザルの中から顧問委員会が実現させるプロジェクトを選び、それを学内で検討する。アーティストはデザイン、建造のプロセスのすべてにおいて、プロポーザルがその特定の場所の条件に合うように制作を行う。大学の方針とコレクションの目的とがうまく合致するように最大の注意が払われる。キャンパスライフに活気を与え、しかも熟慮の結果、完成した作品でなければならない。コレクションの作品を手がけたアーティストの多くには、70年代のコンセプチュアル・アートの様々なマニフェストからの影響が顕著で、作品も知的で「過程」を重視したものが多く、それは通常の無難なパブリック・スケール・オブ・コレクションにはまず見られないものだ。中には、他分野のメディアでは有名だが、パーマメントな野外彫刻は初めて作ったというアーティストもいる。様々なアーティストがそれぞれの観点から場所を選び、問題提起を行ったことに対し、一律の評価を下すことは難しい。例えば、ジャッキー・フェラーラはふたつの新しいビルの間には優雅な中庭を作り、一方、ロバート・アーウィンが授業の合間に学生や先生が散歩をするユーカリの木立の中に、光の変化によって微妙に表情を変える高さ約7.6mの構を作った。(1章 [ジャッキー・フェラーラ]、3章 [ロバート・アーウ

た。区画整理で植えかえられた2本の木の表面を美しい鉛の膜で覆い、土に埋め込まれたスピーカーから何分かに音響のような話し声するという仕掛けを作ったのである。片方の木からはアステカ民族の賛美歌、鳥の鳴き声やタイの民族音楽といった様々なジャンルの詩、物語や音楽が流れ、もう片方の木からはカントリーやウェスタン・ミュージックのようなカウボーイの音楽が流れている。また、すぐ近くの図書館脇に3本目の、鉛で覆われ上下逆さまになった木が、切り刻まれた森へのメモリアル・トータルとして静かに立っている。

丘の頂上に堂々とそびえ立つ作品はリチャード・フライシュナーの [ラ・ホイヤ・プロジェクト] である。71本のグレーとピンクの御影石のブロックは柱、まぐさ、円柱、アーチ、窓、戸口や敷居等といった建築的なヴォキャブラリーに関連して配置されている。これらの要素はそれぞれが空間的相互作用をなし、そのままでは何の文脈もない芝生の丘を、探険したり、空想に遊んだりという時間を過ごすことのできる変化のある場所へと変容させている。

6階建てのビルの頂上に高さ約2mのネオンのフリーズを乗せたブルース・ナウマンの [Vices and Virtues (悪徳と美德)] は対決的テーマの作品である。ネオンの文字は Faith/Lust (誠実/欲望)、Hope/Envy (希望/羨望)、Charity/Sloth (慈善/怠慢) などのように、聖書の有名な七つの美德と七つの悪徳との交錯を表している。美德の言葉がネオンを点滅させながら一定の速度で建物を時計回りに一周し、悪徳の言葉はもう少し遅い速度で反対に回る。一瞬、すべての言葉が同時に点滅する瞬間がある。私達がいかにか「希望」と「羨望」の意味の違いを理解していたとしても、このように作品に取り込んでいるふたつの相反する感情は、混合して同時に存在することはあっても、ひとつだけが純粋に経験されるということはないのだ、とナウマンは言っているのである。各文字は2色で表現されているが、全体としては、長さ約1.6mにも達するネオンが14の異なる色で輝いているように見える。

他に、イアン・ハミルトン・フィンレイのワン・ワード・ポエム (具体詩) の作品 [UNDA] が学生寮の近く、広場の道方に望む水平線に沿って設置されている。

(3章 [イアン・ハミルトン・フィンレイ] の項参照)
(D.F.H./Y.K.)

University of California, San Diego, Cal., U.S.A.

[Richard Fleischner] —1

①La Jolla Project, 1984

[Terry Allen] —2,3

①Trees, 1986

[William Wagner] —4,5

①La Jolla Vista View, 1988

[Nam June Paik] —6,7

①Something Pacific, 1986

[Jackie Ferrara] —8

①Terrace, 1991

[Robert Irwin] —9

①Untitled, 1983

[Niki de Saint Phalle] —10

①San God, 1983

[Ian Hamilton Finlay] —11

①UNDA, 1987

[Bruce Nauman] —12

①Vices and Virtues, 1984



